

# 北方領土隣接地域視察を終えて

流山市立南流山中学校  
教諭 渡邊里奈

## 1・視察事業参加前の認識

私自身恥ずかしながら、視察事業に参加するまで、北方領土について深く理解していなかった。事前知識としては、四島の名称と位置、ロシアとの国境の変化の歴史くらいであった。授業でも掘り下げて取り扱ったことはなかった。視察事業参加に向けて、まずは私が北方領土についてきちんと理解し、授業で領土問題を扱ううえでのヒントを得られたらという思いがあった。

## 2・北方領土関連施設の展示から

羅臼国後展望塔、北海道立北方四島交流センター、北方館・望郷の家の展示から、北方領土について様々なことを学ぶことができ、北方領土の産業やロシアによる北方領土占領の経緯が印象に残った。北方領土の中心産業は漁業であるが、つい最近まで、北方領土周辺での日本漁船の操業が、ロシアとの協定で認められていたことを知った。北方領土周辺の海に日本船が近づくことはできないと思っていたので、驚いた。ロシアによる北方領土占領の経緯の中でも、島から船で脱出した島民と、強制退去させられ樺太での抑留の後日本に引き揚げた島民がいたことが印象に残った。

中でも、展示を見て特に印象に残ったことが、北方領土在住のロシア人との交流である。元島民が墓参などで北方領土を定期的に訪れていることは、ニュースで見たことがあった。しかし、現地在住のロシア人を日本に招いていることはよく知らなかった。羅臼国後展望塔に、羅臼町の一般家庭にロシア人を招くホームビジットの様子や、ロシア人が日本文化を体験する様子が写真で展示されており、日本人・ロシア人が共に笑顔で交流していたことが印象に残った。このような取り組みは、他の隣接地域でも行われている。また、日本政府の北方四島住民支援事業として、医療が充実していない北方四島から患者の受け入れをしていることには驚いた。さらに、北海道立北方四島交流センターには、ロシア文化の展示スペースがあり、ロシアの人々を理解しようとする姿勢に驚かされた。根室市内の道路標識には、日本語・英語に加え、ロシア語が記載されていて、ロシアとの関係の深さがうかがえた。

## 3・元島民の講話から

北方領土への理解を深めるうえで、元島民・角鹿泰司さんの講話は、私にとって大きな経験となった。特に、ロシアによる占領の体験談、ロシア人への印象の変化、北方領土返還要求運動への思いの3点が印象に残った。

ロシアによる占領について、ロシア兵が自宅に土足で上がり拳銃を向けてきた体験や、ロシア兵に見つからないように夜中に島から船で脱出した時の様子を聞くことができた。財産も全て没収されたという。日常が突然奪われる恐怖が感じられた。角鹿さんは、北方領土墓参や北方四島自由訪問の機会を活用して数回島に行ったとのことだが、自分の故郷であるのにロシアの許可なしでは行くことすらできないという理不尽さを感じた。

ロシア人について、角鹿さんは、約20年前まで、血も涙もない人だと思っていたとのことだが、ロシアの人々との交流を通して、「ロシアと仲良くすることが平和のもとになる」と考えるようになったという。ロシア人を憎むのではなく、ロシア人と交流したいという思いが、私の中で

強く印象に残った。

角鹿さんは、共に運動を進めてきた人が亡くなっていくことへのやりきれなさを語っていた。元島民の平均年齢は89歳と高齢になっている。角鹿さんは、令和元年の自由訪問に孫を連れていき、「北方領土返還運動だけは絶対に続けてくれ」と言ったそうだ。「子どもたちに北方領土問題に参加してほしい」「北方領土問題を世界に広めてもらいたい」という角鹿さんの強い思いが印象的であった。

#### 4・実際に見る北方領土から

視察する中で、何度か北方領土を実際に見ることができた。標津サーモン科学館から見た国後島は、想像以上に大きく感じた。その大きさが北方領土との近さを物語っているように感じた。

最終日、納沙布岬から見た歯舞群島は、特に印象に残った。前日にお話をしてくださった角鹿さんの故郷である勇留島も見ることができ、「こんなに近いのに自由に行き来できない」ということが実感できた。最も近い貝殻島は、たった3.7kmしか離れていないにもかかわらず、中間地点である1.85kmを越えてしまうとロシア船にだ捕される可能性があるということを聞き、何とも複雑な心情になった。北方館館長斉藤貴志さんの、「本当の意味でまだ戦争は終わっていない」という言葉が強く印象に残った。

#### 5・視察事業を通して感じたこと

私自身、視察事業参加前は、当事者の方々はロシアに対して敵対意識を持っているのではないかと勝手に思い込んでいた。今回、当事者の方々は、むしろロシアの人々と仲良くしたいという思いを持っていることを知ることができ、私にとって大きな変化となった。至る所に、ロシアの人々の立場や、ロシアの文化を尊重する姿勢がみられた。現在、ロシアのウクライナ侵攻により、交流事業が止まってしまっている。角鹿さんによると、元島民も、北方領土在住のロシアの人々も、交流したいという気持ちを持ち続けているという。人と人とが交流し、互いを理解し合うことが平和への第一歩なのだと実感した。私自身、知らず知らずのうちに、国というフィルターを通して人を判断してしまっていたのではないかと反省した。国を通して人を見るのではなく、自分と同じ一人の人間として接することの大切さを学ぶことができた。

北方領土隣接地域を視察する中で、空港をはじめ、至る所に北方領土返還を求める看板やポスターがあり、関心の高さがうかがえた。一方、千葉県など他の地域では、あまり関心が低いのが現状だと思う。全国的に北方領土問題への関心を高めていくことが課題だと感じた。また、元島民の高齢化が進んでおり、角鹿さんが仰っていたように、若い世代の関心を高めることが必要不可欠だと感じた。

北方領土返還に向けて、中学校教員である私ができることは、一人でも多くの生徒に北方領土問題に関心を持ってもらうことだと思う。私自身、視察事業に参加したことで、さまざまな視点から北方領土について理解を深めることができた。また、資料を読むだけでは得られない、実際に北方領土隣接地域を訪れて感じるものは大きかったと思う。中学校社会科では、1学年の地理、2学年の歴史、3学年の公民でそれぞれ北方領土問題について扱う。授業を通して、今回見聞きしたことを、自分の言葉で生徒に伝えていきたい。また、YouTubeで公開されている動画を活用し、元島民の想いを伝えていきたい。特に、元島民が、国というフィルターを通してではなく、同じ一人の人間としてロシア人と交流していることは伝えていきたい。今回の貴重な経験を生かし、生徒に北方領土問題を知ってもらえるように、取り組んでいきたい。